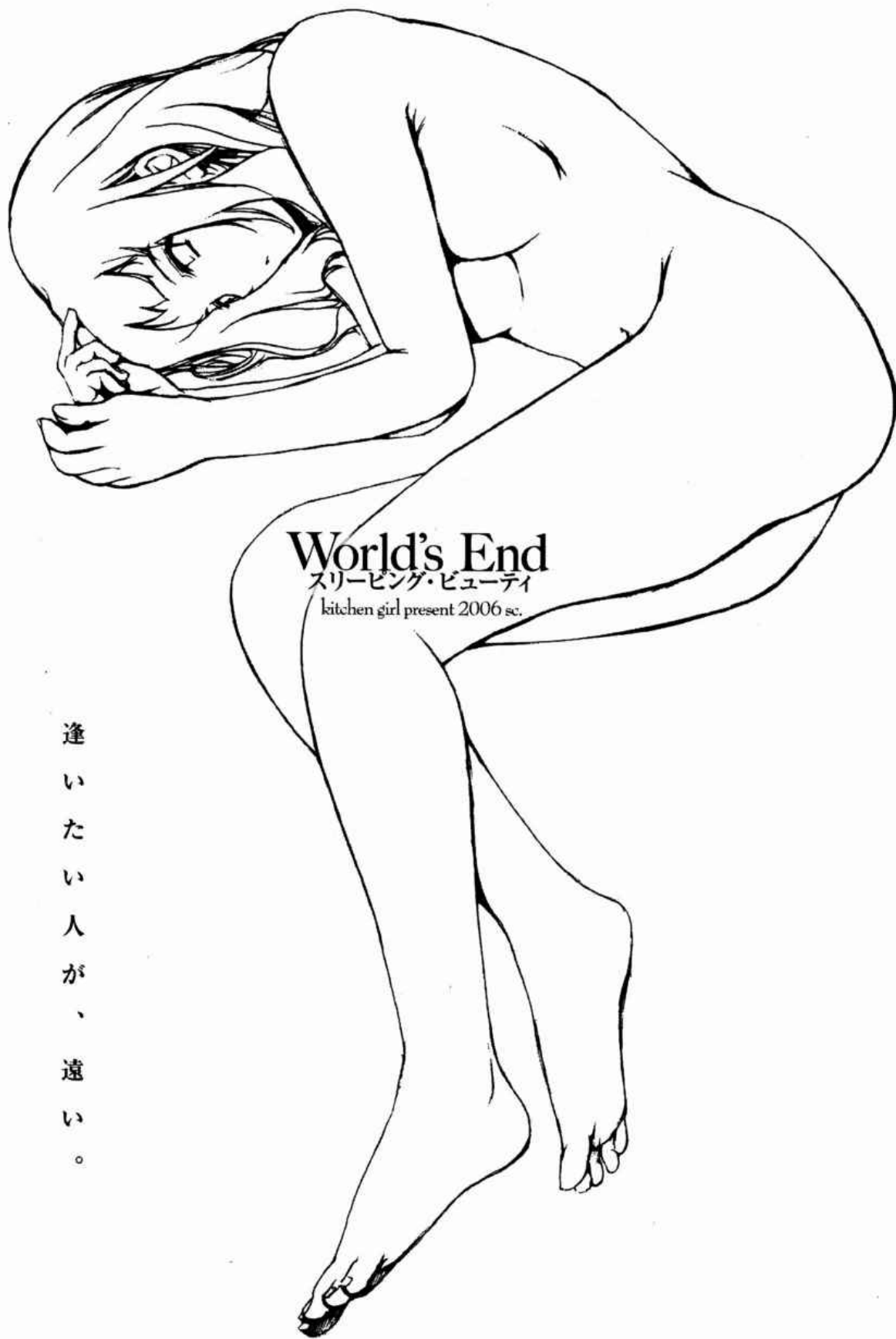


# *sleeping beauty*



World's End  
スリーピング・ビューティ  
kitchen girl present 2006 sc.



# World's End

スリーピング・ビューティ

kitchen girl present 2006 sc.

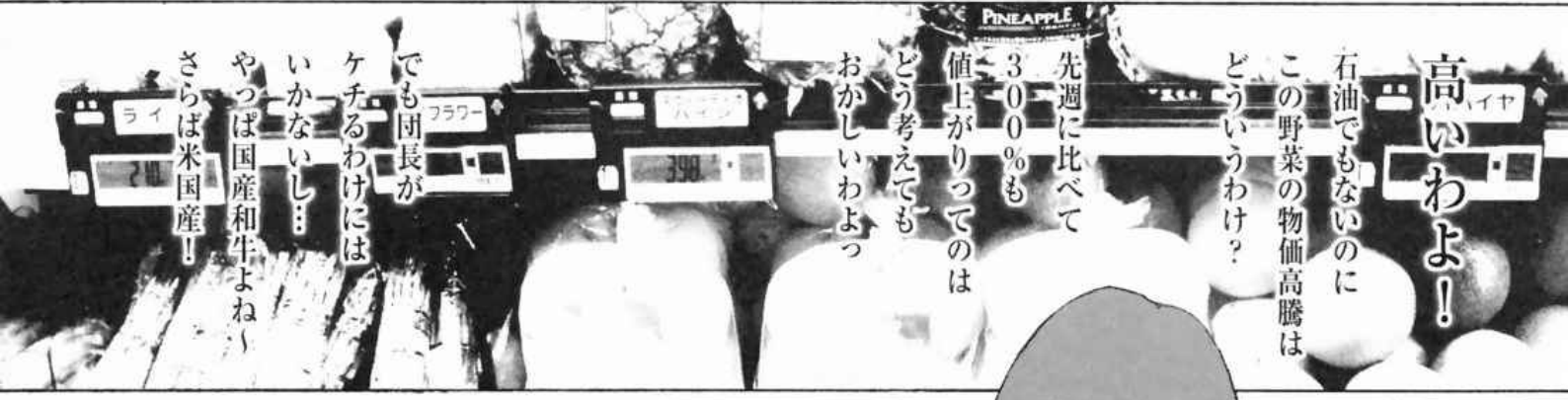
逢  
い  
た  
い  
人  
が  
、  
遠  
い  
。

ハンバーグ、オムライス、シチュー、  
カレーライス、やきそば、お寿司、餃子、  
ジンギスカン、しゃぶしゃぶ、お好み焼き、  
精進料理、アメリカ料理、ヤミ鍋……  
有希って一体何が好物なのかしら？



あの子がお昼に購買で  
菓子パン二十個買ったの見かけたって  
いつかキョンが話してたし、  
とりあえず洋食かな…

それにしても！



高いわよ！

石油でもないのに  
この野菜の物価高騰は  
どういうわけ？

先週に比べて  
300%も  
値上がりつてのは  
どう考えても  
おかしいわよっ

でも団長が  
ケチるわけには  
いかないし…  
やつば国産和牛よね  
さらば米国産！

うう、買い過ぎちゃった…  
近所のスーパーで二万も使うとは！  
でもこれも団員をねぎらう団長の努め。  
がまんしなくちゃ。

ふふ…

いきなり訪ねて行って  
夕飯作ってやるって言ったら  
流星の有希も驚くかしらね…？

でもほんとは…キョンにも食べて欲しかったんだけど。

えっと、確かこのマンションが有希の…





ナニ…コレ。

「き、ききキヨン君っ  
あの、涼宮さんがあああ  
あちらにいい！  
何かを誤解されたのか  
凄い形相でこっち見てるんですけど…」

「気になくていい…」

「いや、世話になったな長門」



何でキヨンとみくるちゃんが  
有希の家にいるわけ…  
休日に、しかも制服姿で。

「あつ あの涼宮さん…  
き、きき奇遇ですね」

みくるちゃんなんて明らかに動揺しちゃってるし。

キヨンも…バツの悪そうな顔で笑ってる。

「あら、三人してこんなところでどうしたのよっ？」

「ああつハルヒ、  
ちよつと長門に用があつてな」

嘘つき。顔がひきつってる。

「おまえこそ長門に用なのか？」

「大した用じゃないのよ、  
ちよつと寄つてみただけ…」

痛いところをつかれた。

でもなんか有希に夕食つくりにきた、  
なんて言える雰囲気じゃないし…

「ハルヒ？ 顔色悪いぞ、  
どうかしたのか？」

わざとらしくキヨンが心配そうに言う。

そんなことで  
あたしはごまかせないのに…



ああ、ダメ、嫌な想像しちゃう…  
だつて知つてるんだ、あたし。

キヨンが有希のこといつも見ること…有希もキヨンを…

ふたりはどんな風にあつちするんだらう？  
きつとキヨンのおつきいチンポを  
愛しいそうにフェラするんだ…

「が、ダメだ長門っそんなにしたら  
出ちやうから…朝比奈さんで一回抜いてから、な？」



「はい、キョン君：  
えっ？ 胸でするんですかあ？  
それはちよつとえつち過ぎる気が…」



「なに言ってるんですか、  
朝比奈さんの巨乳は  
こおおうやって俺のを挟んで  
しこしこするためにあるんですよ？」

「あのっ、あつ」



「こんな感じでしょうか？」

「ウ、アア」

「キョン君…なんかすごいえつちな顔…  
それ卑猥ですよ？」

「すみません朝比奈さん、

予定変更で生挿入させて下さい。

おっぱいに発射するのもったいないですし！」

「へ？ あっあの今日危険日なんですけどお」

「平気ですよ。

妊娠しても長門がなんとかして  
くれますから！」

「全然平気じゃないですよお」



「すみません、もう入れちゃいました」

「うあああああああああああ」

「ひい あっ ふあああ

すっごいいいお腹にいい……！

壊れちゃ あぐう あっ」





ナニ…コレ？

これは…あたしの妄想なんかじゃない…

「長門おまたせつ 今日バクからファックしてやるからな」

やめて

「いっぱいかき回してやるぞ」

「はああああああああああ」

「さっきの射精で朝比奈みくるが妊娠した」

「へっ？…そうなの、まあいいや」

ちがう…こんなのキョンじゃない…

ちがう、ちがうちがうちがうちがうっ

ちがうよねキョン？

「長門のここ、いつ見ても可愛いぞ」

「そう」



お願い…もう

もうやめてよ…てよ…

こんなの見たくないよ…

やめてよ… やめ… てよ…

あれっ… ここ、教室？



なんでこんなところにいるんだろう…

あたしさっきまで…

なんだ… ばかみたい。

夢だったんだ、さっきの全部  
よかった。

そうよ、当然じゃない。  
あの人にふさわしいのは  
有希なんかじゃない…

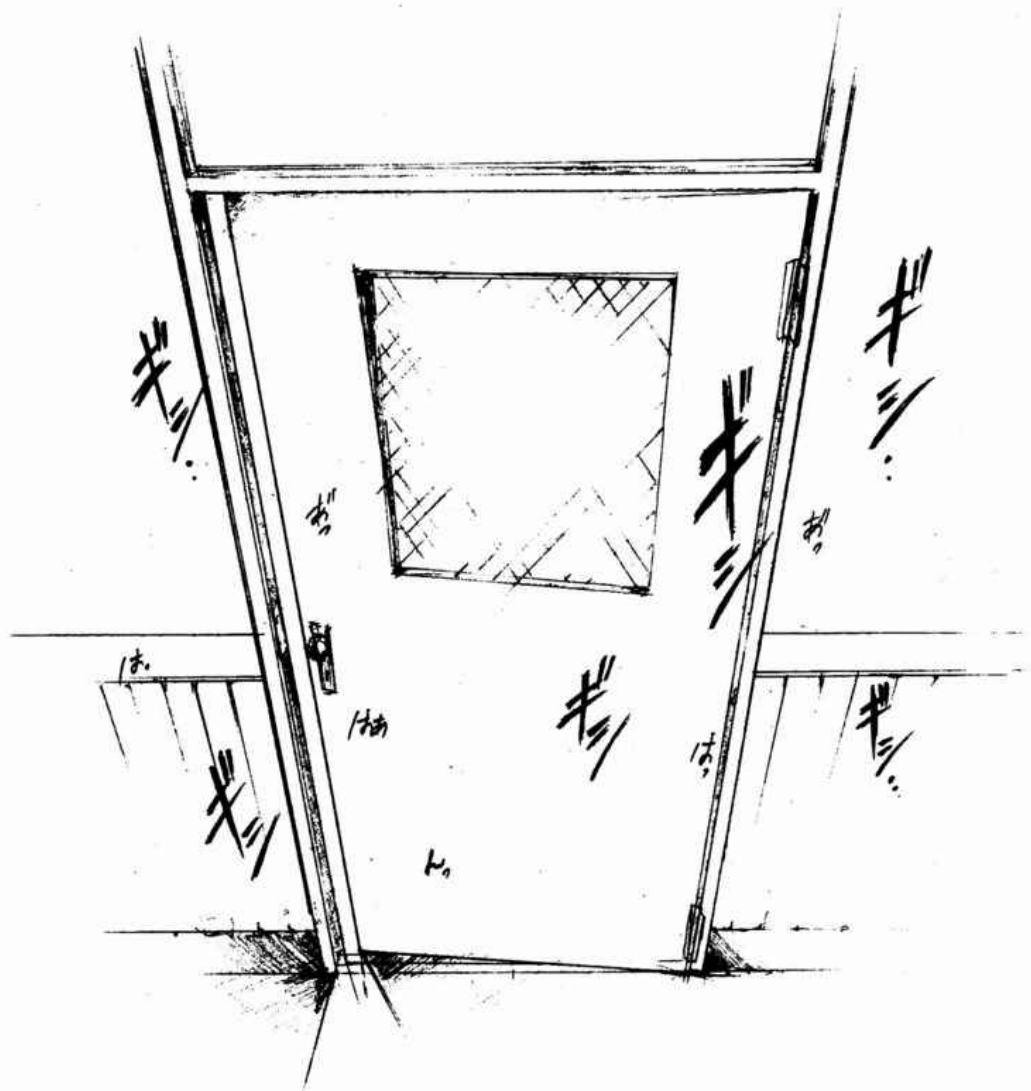
愛されるのはあたしだけでいい。  
キョンが有希ばかりかまうのは  
あたしに振り向いて欲しいからに決まってるし。  
そんな心配いらぬのに…バカねキョン。



「…もう こんな時間だ。」

外が暗い。いま何時間だろう？

そっだ、部室締めになくちや…もうみんな帰っちゃったよね？



あれっ ドア開いて…明かりも…

誰だろう。

キョンだったらいいのに。

開けちゃダメだ。

自分の中で誰かが警告してる。

わかってるわよ。

このドアは開けちゃダメなのよね？

悪いことが起こる…

とても悪いこと。

そう、わかってるの…でも、ダメなのよ。

手が震えて…でも

吸い寄せられる様にドアノブに手が…



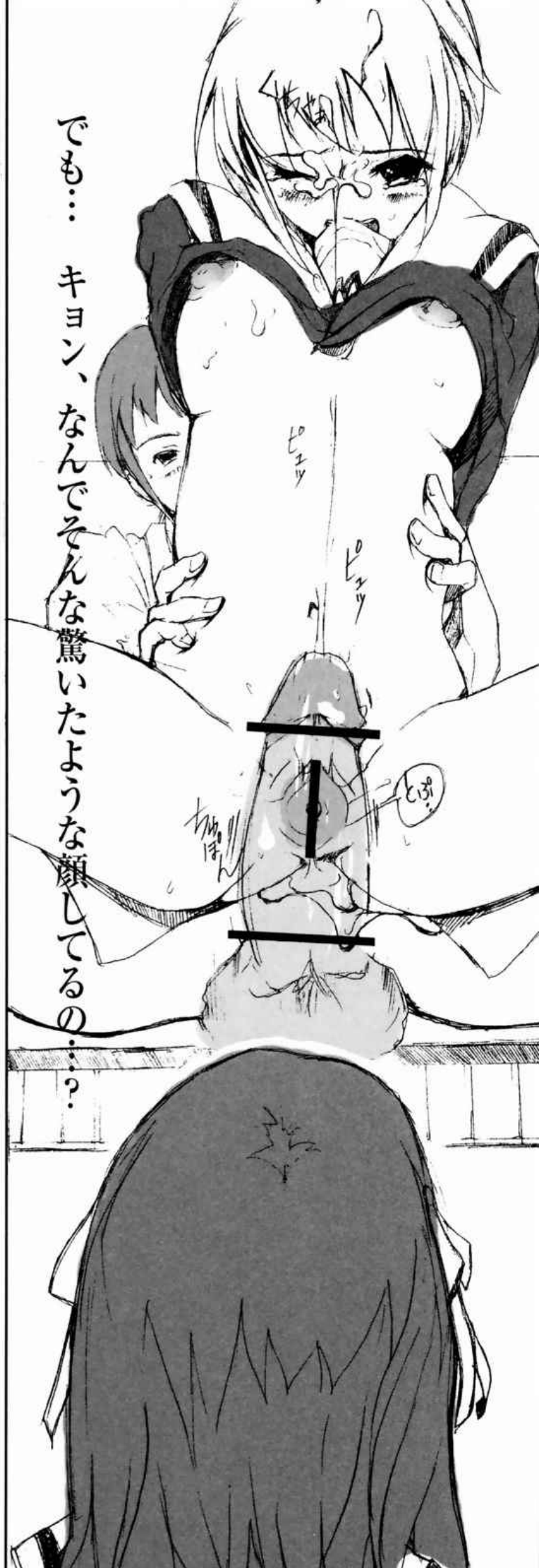
でも今度は大丈夫。  
夢ってわかってるから...

ほら、やっぱり。

「は、ハルヒっ これはその」  
キヨンが困った顔してる。  
「あなた、その白いのが欲しかったんでしょ…」  
有希が何か言った。



でも… キヨン、なんでそんな驚いたような顔してるの…？



夢じゃないいいい…



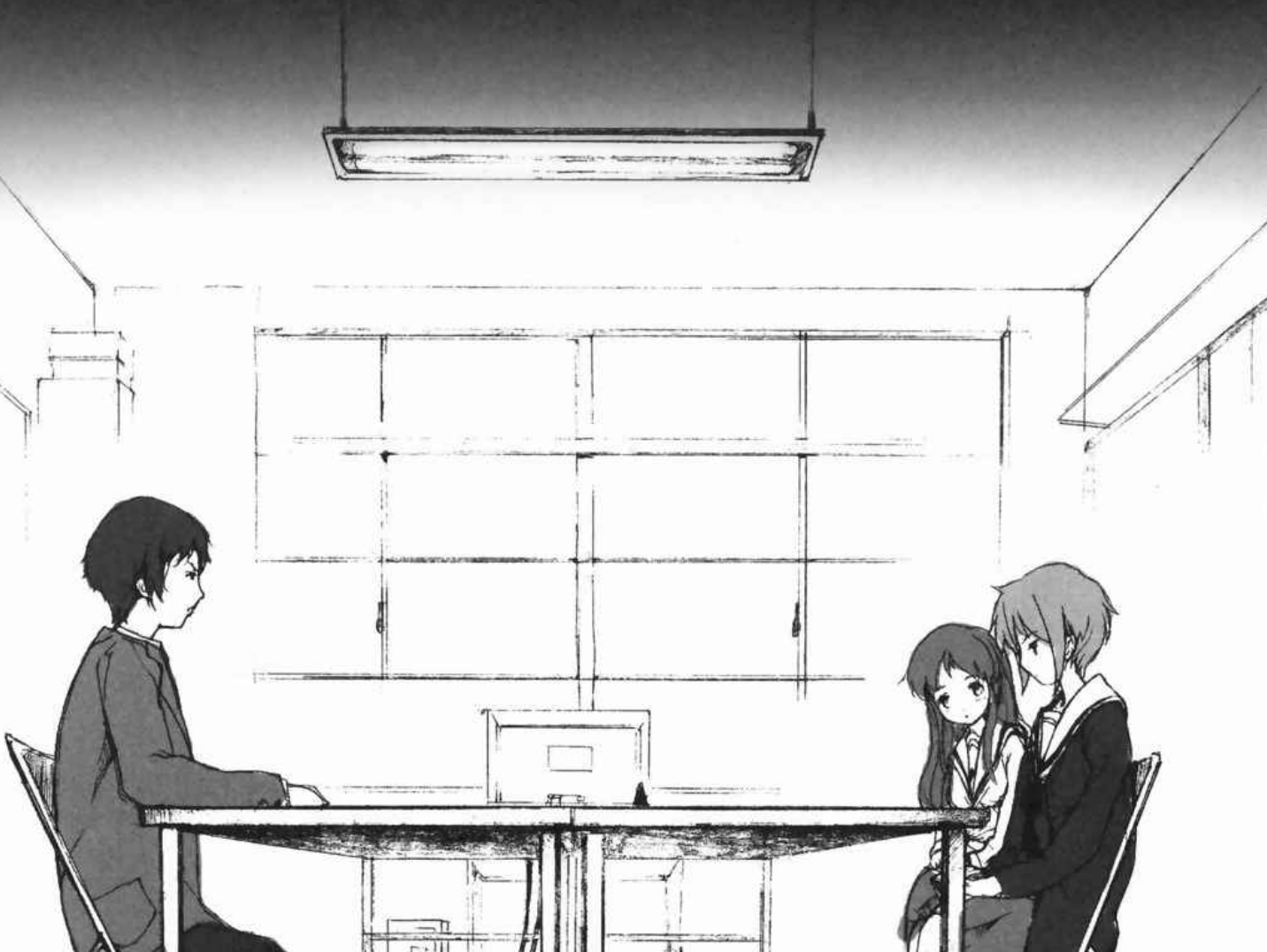
「なあ、長門」

「なに？」

「もう3日もハルヒ学校休んでるんだ。  
おまえ何か訊いてないか？」

「なにも…」

「気になる？」



「涼宮ハルヒは悪夢を見ている」

長門はまっすぐに俺の眼を見て、  
さらりとそう言った。

「わたしは彼女の欲望と恐怖や不安を  
明らかにしてあげただけ…」

簡単だった、と、

精密機械の立てる音のような声で、言った。

「涼宮ハルヒの能力を使い、こちらから逆に

擬似的な閉鎖空間をつくりあげた。

あなたに関する情報が

もつとも精神的ダメージを与えるから…」

「…何が目的なんだ？」



「あなたの自由」

俺の？ よくわからないが…

「涼宮ハルヒが存在し、その能力が健在である限り、  
あなたには何の選択権もなく

一生を彼女とともに過ごすことになる。

私は…そんなことさせない。

させたくないと思んだ。

彼女のいないもうひとつの世界で、

あなたに愛されたかったから…

涼宮ハルヒのように」

長門、俺の気持ちはおまえがよく知ってるはずだろう？

おれはおまえが…

くそっとうしちまったんだよ、長門！



「朝比奈さんっ 俺はハルヒのところ行ってきますから長門を頼みます…！」

言って、あの人は慌ただしく部屋を飛び出していった。

「ながと…さん…」

朝比奈みくるが泣いている。

そっとわたしを抱きしめて、

その体温のあたたかさに

救われる。

「つらかったですよね…」

つらか……うっ ですよね！」

「こんなに あの人が遠い…」

悲しくて死んでしまいたいそうなのに、

わたしは涙もでない」

「いいんです…わたしが長門さんの分まで泣きますから！  
キョン君きつとすぐ帰ってきますっ そしたら」

あの人は帰って来るはずない。

もう998回、それを思い知らされたのだから…





# World's End

スリーピング・ビューティ

kitchen girl present 2006 sc.

キッチンブログ

<http://kitchengirl.blog66.fc2.com/>

発行


キッチンガール

発行日

2006年10月1日

印刷

PICO printing inn co.,ltd



ご購入ありがとうございます。  
長門スキーさんのために  
世界最強の長門本を  
目指して描きました。  
あなたの夢に夜な夜な長門が  
現れますように……

kitchen girl

